

以後、百々が護送警備について尋ねることはなかった。聞いたところで手出しできはしなかったし、そもそも部外秘だ。教えてもらえるはずこそない。

ほかにも知ったハートの不満もまた気がかりを残したが、昨日今日、生じた不和でもないなら彼らこそプロだった。表向きだけでも破綻なくこなすに違いないと信じることにしている。何より今、急ピッチで進めなければならぬのは映画「バスボム」の先行上映と、舞台挨拶の準備だった。

聞くとところによるとノミネート作品の発表に合わせて更新された「20世紀CINEMA」サイトへは、直後からアクセスが殺到しているらしい。電話もひっきりなしに鳴ると混み具合やチケットの問い合わせは、今もなお続いているとのことだった。

ふまえて翌朝、ミーティングは、全員を急遽呼び出して行われている。なにしろ舞台挨拶はブロック監督到着に合わせ十二時二十分、一回目と二回目の上映の間に設定されていた。影響で一回目の上映中止は決定され、それら対応が必須となったからである。ほかにも舞台挨拶のチケットは当日配布の整理番号順での案内が取り決められており、不随する仕事は山積みとなっていた。

受けてスタッフは整理番号券の準備に、ポップの張り替えに、続く問い合わせの対応に、すでに伸びつつある整理券を求める行列整理に散っている。もちろん並行して通常営業も

行われていたなら、一日は水谷が言うとおりでんやわんやとなっていた。

だが百々の姿はといえば、そこにはない。横目に事務所の椅子に腰かけていた。

「当日の十一時三十分。ブラック監督はタクシーで通用口に到着、劇場入りされます。ご案内はわたしがする予定ですが……、更衣室がありますね。百々君はあの向こうに部屋があるのを知ってますか？」

水谷の説明へ耳を傾ける。

「えっと」

宙を睨むとしばし記憶を辿った。

「あ、知っています。けれど開いているのは見たことがないです」

「そこですね。この後、準備に向かいますが、そちらに応接室があります。そこへご案内して、舞台挨拶までの時間を過ごしていただこうと思っています」

なるほど。思えば早速、百々もメモへペンを走らせる。

「百々君も、通用口までお迎えにゆきますか？」

「えっ、いいんですか？」

尋ねられて声を裏返していた。

「そうですね。多くでお迎えした方が印象はいいでしょうから」

とはいえ未曾有の事態に大出血で割いた人員が百々一人なのだから、まったくもっていただけない。しかしながらこれを役得と言わずして、一体なんと言えればいいのか。

「行きます」

迷わず返し、なけなしの語学力もまた披露してみせた。

「ハッ、ハロオオウ、でいいんですよね」

そのしまりのなさは、水谷の笑みをしょっぱくさせるに十分だろう。

「いやあ、ちょっとその、どうですかねえ」

「へっ？」

「じゃ、じゃあ笑顔。笑顔でお願いしましょうかね。誰しも第一印象は大事ですから」

「はい」

などと繰り出した笑みこそ目も当てられないものだったなら、なかった事にする水谷は賢明だった。

「ともかく」

話を元へ戻す。

「舞台挨拶は十二時二十分より開始。三十分間が予定されています。控室からシアターへ入るのには、みなさんと同じ通路、ロビー横からフロアへ出る、あそこを使っていたく予

定です。そこで百々君にはブラック監督が出られた後の控室の施錠と、監督がフロアに出た際はシアターまでの通路確保をお願いしたいと考えています」

百々はメモを再開させ、その手が止まったことを確認した水谷はさらにこうも続けてみせた。

「舞台挨拶はプロの方に司会を依頼してあります。内容は本作のインタビューが中心で、通訳を挟んだ司会者との対談形式です。これは十五分ほどを予定。最後に花束贈呈、客席側を入れての記念撮影を行います。この写真は後ほど宣伝素材として使用するものです。ウチでも引き伸ばしてサインと一緒にロビーに飾ろうかと考えています」

ふんふんと、走る百々のペンは快調だ。

「そこで」

と水谷は言葉を切っていた。どうしたのかと百々はメモから顔を上げる。

「百々君には花束贈呈をしてもらって、そのまま控室前へ移動。帰ってこられたブラック監督のために部屋を開けてもらおうと思っっています」

瞬間、おおっ、と百々の口から声はもれる。

「花束贈呈、あたしがするんですかっ?」

役職も何もないアルバイトのぶんざいで、だ。

「わたしが行ってもいいんですが、フリーでいた方がいいかなと。橋田君もいないわけですからねえ。咄嗟のトラブルに対応できる責任者がホント、いないんですよ」

吐く水谷の表情は苦々しい。

「誰でもいいというわけではありませんけど、お出迎えやらお茶出しやら、やってもらうことになる百々君ですし。その日はこの顔のようなものですから、お願いできると助かるんですけれど」

確かに、そんな具合でここまでやってきた「20世紀CINEMA」だった。仕事にはアルバイトも社員もあまり関係がない様子で、一生懸命やってくれるなら任せてみる。それでいてフォローも怠らないのが水谷流でもあった。だからして前向きと仕事にのめり込むスタッフも少なくなく、それは勤続年数の長いアルバイトが多い点で十分証明されている。「劇場の顔、ですか……」

だからといって持ちかけられた役割は、イベントもクライマックスと二つ返事で返せぬほど大きい。

「一日だけ、ダメですかね？」

分かっているからこそそのぞき込む水谷の顔は心配げだ。眺めていれば百々もまた、勤める役割より渋って準備を滞らせる方がよほど重大のようにさえ思えてくる。そしてよくよ

く考えてみればそれは、こだわるほどもなく終わるに違いない「いい思い出」に過ぎなかった。

「わかりました」

ヒザを打ちつける。

「支配人にしかできないことやってください。その間にわたしが花でもやりでも、渡して投げちゃいますからっ！」

豪語すれば百々へ、砂糖の入ったホットミルクは確かと投げ返されていた。

そう、どうにも素っ頓狂でお調子者、時にどこまで本気でどこからふざけているのか分からない水谷だったが、この時ばかりはまるで違って見えてならない。温厚などと単純すぎる人柄から否応なく滲み出るものは、この人の下においてよかったと思わせてならず、だからして従業員は慕い、それでいて一目置くのだと思う。

そんな皆が囁く水谷マジックに魅了されて百々もまた、がぜんヤル気を倍増させてゆくのだった。

「後はですね」

切り出す水谷はもう表情を仕事のそれへ戻している。

「タクシーを待たせておくと出待ちの客に囲まれる可能性があるので、わたしが改めて手

配します。到着後、通用口までご案内。お見送りで終了です。以降は百々君も表の仕事へ戻ってもらおうつもりでいます」

なるほど。聞けばゲストが飛びぬけて有名人なだけで、段取りはたいして複雑でもない。むしろ舞台挨拶という特異な設定にマイクや照明の設定等、映写室の方が大変なのではと心配してしまうほどだった。

「わかりました。頑張ります」

「お願いしますよ」

返す水谷がまた悪戯げと笑ってみせる。ひっこめ、さっそく、と百々へ、買い出しの指示を出していた。

聞くところによればスタンリー・ブラック監督一行は、通訳とツアーコンダクターに日本人の友人、この四人らしい。舞台挨拶の司会者を加えたなら当日は五人分が目安で、幾ばくかの現金を預かり百々は「20世紀CINEMA」を後にする。

駅前の繁華街へ向かう途中、整理番号の配布を待って他愛もない話に花を咲かせる客を目にし、しばらくも行けば繁華街入口でポスターの張り替えにいそむバイト仲間を見つけていた。気づけばどの顔も、すれ違う見知らぬ人さえ、いやこの街全体がだ。明日の大イベントに胸躍らせているように見えてならなくなる。

ならそのとき王様だと思っていた。

それがひと時これほど人と世界を変えるなら、きっと今でも映画は娯楽の王様で間違いないと百々は思う。住まう映画館は宮殿で間違いなく、そこで練り広げられる明日の舞台挨拶も、だからして誰もが一度は訪れ参加したいと仰ぐ宴になるのだと思えていた。

だとして全てはツクリモノ、しょせんは架空の産物だと言われてしまうかもしれない。うつつを抜かしているだけで王様は裸かもしれない。

けれど一度だろうとこうして胸躍らせたなら分かるはずだと思う。費やした時間は己が人生の一部となると、決して夢、幻とかき消されることのない現実へすり替わる。ちょうど今、見回す世界が様子を変えてしまったように。明日が少しいつもと様子を変えて輝くように。

既存の娯楽は全て、楽しむことを義務付けられた労働だ。

SO WHAT は主張して多量の火を放っている。冗談じゃない。思い返せば怒りはこみあげていた。何しろそうして SO WHAT が消し去ろうとしているのは経済的ダメージなど足元にもおよばない。今、百々が感じている全てだ。

足はいつもの道を辿ると駅へと向かっていた。気づけばハートたちと飲んだ「ヒッキーズダイニングバー」が目の前にある。時間は正午を過ぎたところか。ランチを企画していな

いそこに人影はなく、色を失ったネオン管が侘しげと空へアーチを放っていた。

目にすれば思い出す顔に、百々の胸へ「強襲」の二文字は浮かぶ。それこそ浮かれた自身に罪悪感を覚え、昨晩とは似ても似つかぬ薄汚れたテナントビルをただ見上げた。そうじゃない、と蘇ったレフの言葉に再び固く唇を結びなおしてゆく。

やり方こそ違っているだけだ。目的はセクシヨンCITも「20世紀CINEMA」も変わらない。

接点のない援護。

セクシヨンCITは移送車を無事目的地へ送り届けることで、百々は先行上映を成功させることで明日、互いに娯楽を守り切る。

繁華街を抜け、駅前を横切る国道に出ていた。信号を待って投げた視線の先には、オフイスをかくまう病院がある。きっと彼らはしくじったりしない。なら同じだと百々は自分へ言い聞かせた。

信号が前で青を灯している。

めがけて最初一步を踏み出していた。

翌日、午前十一時。

ガレージへ出るドアは開く。

今日もコート姿で渡会の部下は二人、その両脇についていた。抱え上げられた人物はモスグリーンのコートをはおるとそれも喋らないと言う意思の現れか、前を合わせて口元を覆い、グレーのファーがついたフードを目深にかぶりうつむいている。

と、片側でコートがふと視線を逸らした。警戒に早すぎるという心配こそないだろう。周囲を見回し正面をとらえなおす。そこに用意された護送車をとらえると、後部、左右に開かれたドアの傍ら、腰から拳銃を下げて立つセクシオンCT、バジル・ハートを見た。

今日はさすがに幾らか余分に羽織ってきている様子だ。だがそれが防弾ジョッキとアーミーベストなら、見た目はほとんど変わらない。

そんなハートを前に立ち止まる。カウントが聞こえてきそうな間合いだ。互いに敬礼を交わす。

「榊大輔、本日、中新田村拘置所へ護送のため、連行しました」

「了解。これより中新田村拘置所への護送を開始する」

今日こそ慣れ合う雰囲気にはなれない。軽くうなずき返してコートは車内へ潜り込んだ。間にフードを挟むと、先客の姿もなければ殺風景を極めたシートへ腰をおろす。

見届けハートは観音開きの後部扉を閉めた。施錠し前へ回り込む。少々高い位置にある

助手席へ尻を投げた。

「三人が乗った」

ドアを閉めれば運転席で待機していた制服警官が、挿されたままのキーを捻る。

「了解」

エンジンのかかりは早く、振動を感じながらハートもベストの襟を引き寄せる。

「十一時三分。ただいまより榊大輔の護送を開始する」

通りへ切られたハンドルに、小石を踏み潰すタイヤがピシピシ、鳴っていた。護送車は一路、中新田村拘置所へ向かい走り出す。

ほぼ同時刻だ。

「気合、入れていこうぜ！」

組まれた円陣の中央に十本の手は重なっていた。こんなことをするのは初めてだ。いや、「20世紀CINEMA」の歴史の中でもこれが初めてとなるだろう。突き抜ける田所の声に全員の集中力は高まると、誰もがピタリ三度、体を沈みこませる。高く弾き飛ばして「えいえいおー」で鬨の声を上げた。

整理番号券は早朝にも予定枚数の配布が終了すると、六百人ほどが作る列はテナントビ

ルを半周し、いまや一旦、切れて隣のブロックまで伸びている。

放っておくわけにもゆかず、初回上映三十分前が通常だった開場時間は前倒しされると、しかしながら見ての通り誰一人、遅れることなくこうして声を上げていた。

「じゃ、そろそろ警備の方、来られますからね。みなさん、よろしくお願いしますよ」

水谷の声を合図に己が配置へ散ってゆくスタッフの気合は張り詰める空気に現れている。社員の橋田がいないせいだ。映画のヘルプとして駆けつけられるよう田所もまた、映写室に一番近い発券業務の最終チェックを行っていた。

ロビーの鉄扉が開いたのはその最中で、奥から警備員は姿を現している。夜間、預けていた吸殻入れがいつもの場所へ据え置かれる。開館のきっかけと、警備員もまた立ち去り間際、二言、三言、水谷へ声をかけていた。

「それじゃ、離れますね」

見送った水谷が田所へ投げる。

はい、と短く返した田所はいつも通りでもあった。

「20世紀CINEMA、開場、しまーすっ!」

重なり正面入り口から担当の声が響く。足元の穴へ鍵は差し込まれていた。

「じゃ、行きましようか。百々君」

言う水谷へ百々もよろしくお願いします、と頭を下げる。待ちかねた人の話し声は、そんな百々の傍らからとたんどうつと流れ込んできていた。

ついに始まった発券作業へ背を向ける。任せて水谷の後につくとバックヤードへと潜り込んでいった。

「第二ポイント通過。周囲に不審車はなし」

告げてハートは胸元のマイクからアゴを引き戻す。

今回、高速道路は使用していない。何らかの理由で進路が塞がれ、万が一にも強襲を受けた場合、護送経路の変更はおろか退路さえなくなるうえ、一般車両の避難も困難になると判断したためだ。そうして組み上げられた護送経路は全行程二時間四十分。そのうち署を出てからの三十分余りが、今しがた抜け出してきた住宅街だった。

「この先、目立った渋滞は確認されていません。おおむね順調。各ポイント配備中の署員からも不審人物、不審車の報告なし。周辺地域での事故、事件なし。引き続き予定通りの走行を願います」

十一時三十七分。グレーの護送車は現在、周囲の車両に馴染む以上、今どきのデザインに埋もれて片側二車線の産業道路を走っている。

「了解」

揺られながら答えてハートは、その助手席で深く腕を組んでいった。

「聞いたか。このまま何事もなく目的地へついちまうかもしれないな」

呼びかけた相手は後方を走るワインレッドのワゴン、そこに乗るレフとストラヴィンスキーだ。覆面パトカーは先刻通り一定区間ごとに張り込んでいるが、護送車に張り付いているのは後にも先にもこの一台のみとなっている。

「それ、何よりじゃないですか」

ストラヴィンスキーが返して言った。

「そいつは強襲をかけてきた奴らを全員、取り押さえてから言う言葉だな」

周囲へくまなく視線を走らせレフも口を開く。詰まるところ今日はストラヴィンスキーが運転手を務めていた。

「何よりでした、ってね」

ハンドルを握ったままで肩をすくめる。チラリ、レフへ視線を投げた。

「誰もドジったりしませんよ」

「だが現れたとして人数さえ把握できていないのが現状だ。気は抜くな」

間へ割って入ったのは百合草だ。

「一ダース、トラックに満載で現れるか？」

ハートが鼻で笑い飛ばす。

「後方でひっかかるな」

便乗するレフに思わずストラヴィンスキーも笑んだところで、釘は刺されていた。

「面白い冗談は打ち上げにでも取っておけ」

「二百メートル先、次の信号は回避不能です。停車時間、四分」

オペレーターが状況を読み上げる。

間もなく前方で信号が赤へと変わっていた。従い、踏まれるブレーキにテールランプのドミノ倒しが始まる。見る間に車間は詰まり、自身でも時間を確認するレフがフロントガラスの高さへ自身の腕を持ち上げた。巻き付けられた時計の文字盤を読みながら、向こうに広がる周囲へもまた視線を這わせる。

と違和感は視界を横切っていた。サイドミラーの中だ。映る影が見るまに大きくなってゆく。

「二分四十四秒経過」

読み上げ、カウントをストラヴィンスキーへ預けた。

「なんです？」

問うストラヴィンスキーに慌てた様子はない。

「後方からバイクが一台」

間違いない。サイドミラーの中をバイクは一台、路肩を一直線に近づいてきていた。近づき過ぎてサイドミラーからはみ出したなら、レフは視界をルームミラーへ切り替える。万が一に備えてシフトレバーを握りなおしたストラヴィンスキーもまた、ルームミラーへ視線を投げていた。

瞬間、バイクは車間へもぐり込む。大きく蛇行して再び路肩へ姿を現した。

「グリーンとイエローのダウンジャケット。ジーンズ。白っぽいフルフェイスのヘルメット。男だ。車体はシルバー。排気量は四百程度に見える」

映りこんだ特徴をレフは急ぎ並べてゆく。そのうちにも報告に間違いがないことを見せつけバイクはゆう、とワゴンを追い抜いていった。護送車の後ろについたところで見えたナンバーもまたレフは読み上げる。

「ハート」

混雑した路面でならよくある光景だが状況が状況だ。神経質にならざるを得ない。呼びかけた。

「左後方だ」

「荷物は？」

問い返されてレフはライダーの全身へ視線を這わせた。

「車体には見当たらない。シヨルダーバックをたすき掛けに背負っている。厚みはない。それ以外、見える場所に携帯しているものは確認できない」

そこで信号は青を灯し、進み始めた先頭車両に車列は緩慢と伸びていった。ならって護送車も前進を始め、お魚用にアクセルを吹かせたライダーの足先がクラッチを切り替る。そうして後につくのかと思いきや一気に加速。護送車へ並んでみせた。

「窓に注意」

告げたレフの手がドアノブへ触れる。

かぶさり流れたオペレーターの口調こそ早かった。

「ナンバー確認。イージーメールカンパニー。バイク便です。発送あり。車体の盗難届けは出ていません」

そんなバイクはもう護送車の窓に鼻先を並べている。言う通りとライダーが中をのぞき込むこともなければ、振り返ることもなかった。車体をさらに加速させる。それきり交差点を渡って行った。

「あれか。今、追い越していった」

見送りハートがこぼす。

間髪入れず、念のため職質をかけると指示する百合草の声がイヤホンからもれていた。

周囲では何台かの車が右折、左折と産業道路を離れている。だが以後、護送車とワゴンの間へ入り込んでくる車両はなかった。ただ曽我の声だけが改め誰もへ注意を促す。

「ここから先、予定通り信号に引っかかることはないわ。ただしおよそ四十分後ね。るるロード前交差点だけは買い物客の車両が集中。混雑の回避は難しい。交通量の調整はしているけれど、渡り切るまで今のようには停まる可能性があることを忘れないで」

拘置所は、そんな交差点を右折、乗り換えた国道をさらに一時間ほど山手へ上がったところだ。そして言うまでもなく「るるロード」とは、ショッピングセンターにスポーツ施設、劇場までを囲った大型複合施設の名称だった。一帯には昔からの商店街もまた伸びると、大型複合施設とのディスカウント合戦が多くの人を呼び込む賑やかな場所となっている。

目指す道中は平穏だった。

さらにもう一基、多くの車両と共に信号機をやり過ごす。

「驚かせやがる」

思い出したようにレフがこぼしていた。

「レフでも驚かされることがあるんですね」

返すストラヴィンスキーに他意はない。

「俺もただの人間だ」

あることを確かめて、銃のグリップへとただ触れる。

そう、同じ人間なら緊張する必要などありはしなかった。禁じられたとは言え、おもてなしのハローは胸の内で大盛に。満面の笑みでいまやおそしと百々は開いたタクシーのドアを見つめる。

と足は、後部座席から突き出されていた。コットンパンツからのぞく真新しいスニーカーが捉えた地面を踏みしめる。おっつけ少し大げさな息遣は聞こえて、力に変えて中からキャメル色のブルゾンを持ち上がった。

思ったほど大きな人物ではないらしい。いや、レフという外国人を身近に見過ぎたせい。タクシーの後部座席からは赤毛の外国人女性と日本人らしき中年男性もまた降りてくる。見て取った通りの向こうからたちまち黄色い声は上がり、目に収めんとして人垣はその圧力を高めた。

迎える水谷の英語は巧みそのものだ。朗らかに、実にそつなく誰もと熱烈と握手をかわしてゆく。

なら巡ってついにその顔は百々へも向けられていた。日本が好きだと言うだけはあつて会釈がさまになっている。だからか、まとうのは巨匠という威圧感より穏やかで丸いという印象が強い。しかし黄色い声の上がり続ける沿道へ振り返れば、とたんその姿は作品作りの中で数百人ものスタッフを動かし、見るため何万人をも動かして然りのパワーに満ちあふれる。

この人があの映画を撮ったんだ。思わずにはおれなかった。高らかに突き上げた手で監督、スタンリー・ブラックは、ファンの声援に応えて微笑む。

「超、イイヒトそうじゃん。もっと気難しくてさ、神経質な人かと思ってたけど全然ちがう」
言う音量は興奮のあまりその範疇を超えていたが、れっきとした独り言だ。吐く百々は通用口から入ったところ、警備員室の隣にある給湯室にいた。

ブラック監督一行は水谷の案内で控室へ移動中だ。別れて百々は、こうしてお茶の準備に取りかかっていた。

「うん。絶対、タドコロに報告しなきゃ」

決意と共にドリップ式のコーヒーと緑茶のセットが乗った盆を持ち上げる。

「う、お」

これが見た目通りで相当、重い。筋肉痛も予想とおり頂点なら、唸って百々は気合いを入れなおした。

通用口前では警備員が、いつもと違いどっかとパイプ椅子に腰を下ろして出入りする人間を見張っている。聞くところによるとファンからのプレゼントは今も後を絶たないらしく、不特定多数の出入りに緊張状態は続いているとのことだった。

ともかくにも侮れないのは熱狂的なファンの存在で、彼らは時に崇拜者のためなら犯罪もいとわぬ暴挙に出るのだから気が抜けない、とのことらしい。たとえばコッソリ侵入されて、いやそれ以上、監督が娯楽界の重要人物であればこそだ。預かっているだけで託されたプレゼントが爆発したり、試写の開場にテロリストが紛れていたなら一大事だろう。「はっ。だめら。いつの間にか完全に洗脳されてるよ」

などと、目くるめく過剰な妄想が展開されかけて百々は我へ返る。

「れ?」

そうして見据えた通路へふい、と飛び出してきたマスタード色の制服に眉をへこませる。間違いなかった。田所だ。更衣室前で足踏みしたかと思えば、そこに百々がいることさえ気付かぬ様子で控室へ身をひるがえしている。

「ど、して?」

持ち場を抜け出しブラック監督を盗み見に来た、などと言うのなら、それこそ頭からポットの湯をかけるしかないだろう。

でなければ。

過ったとたん声は百々の口から飛び出していた。

「タドコロっ！」

劇場で何かあったに違いない。思うまま両目へ力をこめてゆく。

それもこれも順調過ぎることへの代償だった。バイクが去ってからというもの、沈黙は居心地悪いほどと続いている。

満たす護送車とワゴンは現在、片側二車線の産業道路を走っていた。ならそれは先程までの続きのような口調である。

「百々さん今頃、なんでしたっけ？」

ストラヴィンスキーが話し出していた。

「舞台挨拶だ」

これまた続きのように返してハートが答える。思い出したか頭を揺らし、ストラヴィンスキーはうなずいてみせた。

「スタンプラリー・ブックだったかな？ 監督の映画が百々さんの映画館で始まるって。大変そうでしたよ」

だがそれが息詰まる沈黙に対抗した彼なりの気遣いだったなら、無理もほどほどに言うべきだろう。あまりの見切り発車は次にレフの口を開かせることとなる。

「それはスタンリー・ブラックの間違いじゃないのか」

「え、レフは知ってるんですか？」

路面が混雑し始めたらしい。近づく護送車のテールに、ワゴンは速度を落としてゆく。比喩してぐっと周囲の密度は増し、なおさら警戒するレフの目は忙しく動いて辺りを監視し続けた。

「有名な監督だからな。四年前の映画も二度、見に行った」

「へえ」とストラヴィンスキーは相槌を打つ。なら感想は、要求してもいないのに聞かされていた。

「泣ける」

刹那、危うくワゴンは護送車に追突しかける。

「ここから二百メートル。るるロード前交差点まで渋滞発生中です」

告げるオペレーターは今の発言を聞いていなかったのか。ともあれ追突しかけたのは、

この渋滞に護送車が急にブレーキをかけたせいで間違いない。いやそのせいにしてストラヴィンスキーは急ぎ車間を取りなおした。眼鏡のブリッジを押し上げる。戦々恐々、レフヘ振り返っていった。

「すごい、監督なんですね、やっぱり」

十二時十二分。「るるロード」前交差点手前。これもまた予定通りの足踏みだった。

「うそおっ！」

唸って百々は目を見開く。それでも田所は盆を持ち、こうして控室までを手伝ってくれていた。

「松川さん、体調不良なおっ？」

そう松川とは田所が今、映写を教えてもらっている社員であり、「20世紀CINEMA」の実質的な専属映写技師だ。

「だって朝、元氣そうだったじゃんっ」

「昨日から体調、悪かったって。けど今日、橋田さん出張だろ。支配人もコッチ、手が離せないってわかってたから、休めないと思って言えなかったって」

教える田所は今にもガー、と鳴きだしそうに唇を尖らせている。

「そうだけどお」

百々は唸るが、困り果てたのは田所の方が先なのだから繰り出す足はまた速度を上げていた。

「松川さんは？」

並べる肩で確かめる。

「トイレ。なんか悪いモン、食ったんじゃないかってよ」

「まあつつ、かわさあんっ！」

「とにかく、俺、そのこと話しに来たから」

などと事態はどれほど滑稽だろうと、言う田所は真剣だ。いや満員御礼の先行上映会が控えていたなら、ならざるを得ない状況だった。

「わかった」

百々も至極真面目とアゴを引き返す。「応接室」とプレートトの張られたドアの前で足を止めた。そうしてほぐしにかかるのはハプニングで強張った顔で、預けていた盆を求めて手を突き出す。

「ありがとう」

「いい感じじゃん」

乗せた田所の渋い顔も、その時ばかりはほころんでいた。

「当たり前」

返して百々は息を吸い込む。絶妙の間合いを狙いノックを繰り返した。

返事はない。

やがてわずか浮き上がったドアの向こうから水谷が顔をのぞかせる。目は当然のことながらここにいるはずのない田所を捉え、無言でうなずく田所にそれだけで何かあったと悟った様子だ。盆のチェックをすませて百々へ道を開ける。

とたん昨日、磨いたセンターテーブルは百々の目へ、やたら光り輝き飛び込んできた。わけを明かして向こう側に腰掛けるブラック監督の姿を目にする。通訳に違いはない。傍らには赤毛の女性があり、そんな二人の右手に友人と思しき日本人男性はいた。見当たらない人物こそツアーコンダクターだったのだろう。ざっととらえて百々は、己が人生におけるまさにランウェイを歩く。通訳の傍らへ回り込んでいった。

そうして盆を置けば前のめりだ。早速、のぞき込んでくるブラック監督の近さがエグい。「リョクチャ。じゃばにーず、ぐりーんてい」

「はい、玉露入りです」

向けられた笑顔に心の中で狂喜乱舞した。

「おおう、ギョクロ。ヨイオチャ、デスネ」

監督が首を振ったなら、慌てず騒がずこうも提案して指し示す。

「コーヒーもご用意出来ますが……」

「のの、リョクチャガ、ノミタイデスネ。アツイノヲ、オネガイシマス」

とたん突き出した手を振る監督のチャーミングさに、圧倒されてみた。と、リサーチ不足が発覚したのはその時だ。通訳はカフェインが飲めないと知らされる。

「申し訳ありません。代わりをお持ちします。少し待っていただけますか？」

「ああ、いえ。では自分で何か」

監督へ目配せするなり立ち上がる身は軽い。友人もまた不慣れだろうと、その後が続いていた。

「いえ、あの、すぐご用意できますので」

「ハナシテ、イナカッタデスネ。ういあー、そーりー」

などと、ブラック監督にまで謝られてしまえばもう收拾がつかなくなる。おたおたするうちにも二人は部屋を出てゆき、通路でその後ろ姿を不思議そうに見送った水谷が話し込んでいた田所と共に部屋へ戻っていた。

英語で手短と始められた説明は、これからの段取りだろう。ここでもノープロブレム、と

肩をすくめるブラック監督は愛想がよく、安心した水谷もいつも通りだ。百々へと投げた。

「じゃ、映写室に行ってますから。百々君、後は頼みましたね」

「はい」

ドアで田所も、硬直したような一礼を披露している。

そんな二人が出てゆけば部屋は一段と静かになっていた。

やけに広くなったな。

思い百々も辺りを見回す。

とたん汗を吹き出していた。そらそうだ。何しろあれだけひしめいていた人間は、気づけば今や熱い緑茶を待つ天下の巨匠と百々のみになっている。そんなのアリか。思うが助けなど来ようはずがない。恐る恐る、が相当だった。百々はブラック監督へ振り返ってゆく。

「リヨクチャ、タノシミデス」

向けられた満面の笑みに叫び出しそうになっていた。

前へ親指は立てられる。

「ギョクロ、いえー」

この無邪気さを無に帰す度胸が果たしてあるか。のみならず親しみに敬意を感じている

からこそだった。

「ぎよ、玉露、イエー……」

引きつっていようとめいっばい、百々も笑って指を立て返す。

というか、このノリで合っているのか。分からないからただちに湯を注ぎにかかった。胸の内で支配人カムバックを繰り返しながら。

映画の内容が気になるあまり集中できないじゃないか。ストラヴィンスキーが思ったかどうかは定かでない。ただレフの一言で話は立ち消えとなり、しかしながら車両の流れだけは止まることなく動き続ける。予定通り、十二時二十分を前にして混雑の中核「るるロード」前交差点に辿り着いていた。

そんな交差点左角にはパーキング待ちらしい、車列が出来上がっている。「るるロード」野エントランスはその先頭で広がると、信号を待つ人を散らばせていた。

渡った向かいにのぞくのは昔懐かしい商店街のアーケードだ。そこもまたひっきりなしと、人の出入りは確認できた。

操って交差点は全方向へ歩行者を促した後、車両へ道をあけるローテーションを採って

いる。歩行者が渡り終えた現在はいえ、車両へ青を灯していた。

「戦場だな」

右折に左折、はたまた直線と、もつれ合うように流れゆく車を眺めてハートがこぼす。乗せた護送車もまた前方のタクシーにならうと、右折に備え車線を切り替えていった。

「十二時十七分。第三ポイント侵入。るるロード前交差点を右折する」
「了解しました」

タクシーの前を一台、セダンが前を横切っていった。見送るタクシーはおそらく、まもなく迫るジープもまたやり過ぎてから右折するつもりなのだろう。

が、それは目の覚めるような唐突さだった。突如、ジープは直線を逸れる。タクシー目にかけて、いや護送車へか、交差点へ入るなりカーブを切った。車体は勢いにドリフトさながら十字路を滑り、白煙噴き上げ誰も進路をこれでもかと塞ぐ。

さて、どんな急用だろうとそんなジープに漂うのはただならぬ気迫に違いなく、これを殺気と取れなければ付き添う面々は乗り合わせただけの客人だろう。

「対向車線よりジープ、急接近！」

追突しかけてタクシーが急ブレーキを踏み、そのテールに突っ込みかけた護送車もまた中の人間をシェイクして急停止する。ゆえにこちらもブレーキのベタ踏みだ。突っ張る腕

でそれどころではないだろう護送車に代わり、ストラヴィンスキーが声を張った。

「バック。産業道路へ戻れッ」

信号はまだ青だ。見て取り促すレフが周囲へ頭を振る。

間にも車体を横に停車したジープのドアは浮き上がっていた。前後左右の三方からだ。やおら男は三人、姿を現す。

「こんなところですかッ！」

ハートが唸るのもっともだろう。そんな彼らの着衣こそカジュアルだったが、頭にかぶっているのは白昼のショッピング街へ溶け込むに相当無理ある目だし帽だ。その手にはモデルガンなのか実銃なのか、形状からしてサブマシンガン、MP5もまた握られていた。「来たぞ、ぼやぼやするなッ！」

腰も低く駆け寄ってくる目だし帽の前に、ハートが制服へ櫛を飛ばす。だが慌てふためく制服の手足はまるでかみ合っていない。入れ損ねたギアがゴリゴリ、床下で音を立てた。

「落ち着け」

見守り、じれったいとレフがワゴンのドアを押し開ける。

「コレ、装甲車じゃないですよ！」

背へ投げるストラヴィンスキーは心得ていた。

片耳に低く保った姿勢で足早と、レフはリアへ移動する。引き抜いた銃のセイフティを弾き上げるが早いか、チェンバーへ弾を送り込んだ。

「あれがホンモノだったらな」

後続からは盛大と、動かぬ車列にクラクションが鳴らされている。放ってじわり、レフはワゴンのリアから目をのぞかせた。悪くない動きだと思う。そこで護送車の手前と向こうに分かれ、目出し帽らは後方ドアへ回り込もうとしていた。

刹那、繋がったギアに護送車が動き始める。

後退するかと思われたそのとき、MP5は火を吹いた。銃声がこなれたシンガールのスキヤットよろしく連なって、モノの真偽を明らかにすると護送車のフロントへ風穴を空ける。

「ホンモノらしいぞ！」

知らせるハートはつまり無事だ。

「わお！」

当たりくじを引き当てたあんばいで、ストラヴィンスキーも声を上げる。

それきりしゃっくりでもしたかのように跳ねて護送車は微動だにしなくなった。

目かけてレフは背を浮かせる。

「引き付けるッ」

テールを盾に銃口を振り上げた。

小さく吐いた息で二発。気づいて相手が振り返ったなら、その動きを追ってさらに二発。護送車の手前へ回り込みかけていた目だし帽へと放つ。

泳いでいた目がひとところを捕らえたところでまずい、とリアへ身を沈ませた。

間髪入れず放たれた九ミリ弾に容赦はない。

「だから言ったんですよ！」

中で伏せているだろうストラヴィンスキーの説教こそ後の祭りだ。

食らう間にも、ここぞとばかりエンジンをかけなおした護送車がバックを試みる。だが騒動に、對抗車線の右折待ちレーンから飛び出すトラックと接触しかけて再びその場に押し留まった。

「バカヤロウ！ どけッ！」

怒鳴るハードが逃げ去るトラックへ手を振り上げる。

レフもまたそのテールをワゴンの影から見送った。視線を引き戻しかけてすれ違いざま、パーキング待ちの列を抜け出すシルバーパーバンは、それきり交差点へ突っ込んでゆく。

見る間に加速してゆくシルバーパーバンは、それきり交差点へ突っ込んでゆく。
「るるロード前ッ」

咄嗟と声は上がっていた。

おっつけ背後の掃射も切れる。

跳ね上げた尻でレフは肩を切り返していた。

撃ち込む相手の位置はすでに目星がついている。

手ごたえと共にのけぞる目だし帽が路面で跳ねた。重なり背後でタイヤは鳴って、それでも車両を流していた直線レーンの先頭だ。沈み込むように急停止した車両の鼻先をかすめ、あのシルバーパーバンは交差点へ飛び込んでくる。我がもの顔とフルに使ったスペースでドリフト全開。護送車へその鼻先を向けなおした。

もう疑いようがない。仲間だ。

「面倒くさい。逃げるのはやめだ！」

見て取ったハートが吐き捨てる。

「ていうかコレ、挟み込まれただけですよ！」

正したストラヴィンスキーもまたレフへと放った。

「出します！」

もちろんワゴンを、だ。

「行けッ」

馬でも走らせるようにしてその尻を、レフも叩いてワゴンを押し出した。

街はいつしか描かれた絵のように固まっている。ただ中で道を分け、レフもアスファルトを蹴りつけた。

「粗茶、ですが……」

つ、と茶を差し出した。

様子がどこか滑稽に映るのは、天真爛漫な巨匠とどこの馬の骨だか分からぬアルバイトの組み合わせが効いているせいだろう。

「ソチャ」

百々はかしこまり、前で監督も神妙と湯呑みをのぞき込んでみせる。

「シツテイマスヨ。イチバンノ、オチャヲダストキノ、アイコトバデスネ」

感心しきって首を振ると、あるはずもない着物の袖を整えた。そうしてうやうやしく両手で湯呑みを包み込み持ち上げた監督は、果たして茶たくが底に吸いつこうと、マズイと手を出した百々の前でカポンと外れて落ちようと、気にせず粛々茶をあおってゆく。「かあつ」と唸って一転、湯呑をテーブルへ戻した。

「アツイ」

なぜ第一声が味についてではないのか。

「あ、す、すみません。別のものに」

それこそつんのめりそうになって百々は踏み止まる。

「イエ、ケッコウデゴザル。コレガニホンノ、ワサビ、デスネ」

制するその言動こそ、つつこみどころが満載だろう。

だが雰囲気ではない。聞き流せ。誰かは百々へ言い聞かせ、従えばついに理性に不調は起きていた。

「は、はっ。せんえつ至極にございます」

日常会話までもがもうおかしい。

様子になんまり、監督は頬を崩してゆく。やがて辛抱たまらんと肩をゆすり笑ってみせた。

「ワサビハ、カライデスネ」

その通りだとしか思えないのだから、百々にはわけがわからない。

「ていき、いーじー。キョウハ、せれもにーデスネ。イツシヨニ、タノシミマシヨウ」

ダンシン、ダンシン、と肩を振って踊り出す仕草は、呆然とする百々より滑稽だ。

おかげでようやく百々は理解する。自身が巨匠と呼ばれていることを知るからこそだ。お

どけたそれは氣遣い、と言う名の道化で間違ひなかつた。一部始終に呆氣にとられ、向けられる笑顔の眩しさに百々は腹立たしいような申し訳ないような気持ちにまみれてみた。それでいて残るのが嬉しい気持ちだけだったなら、日本語でさえどう言つて返せばいいのか分からなくなる。

と、次を投げてすまし顔だ。作つた監督は向かいのソファへわざとらしいほどの視線を投じた。追いかけて振り返つたそこに置かれていたのは色紙だろう。意味するところはすにも伝わり、百々は急ぎ色紙を手繰り寄せていた。

「お、お願いします」

差し出せば監督は待つていましたといわんばかりで、百々をソファへ座らせる。のぞき込む視線を遮り色紙を立てると、ゴキゲンとそこへペンを走らせていった。

「エイガハ、ミマシタカ？」

ひと筆で終わらぬそれは、ずいぶん凝つたものらしい。

「は、はい。誰よりも早く」

たずねてそれは素晴らしい、とうなずき返しもする。

「ドウデシタカ？」

問いかけには百々の背筋も伸び上がっていた。

「はいっ、よかったですっ！ どのシーンも綺麗で繊細で、ストーリーもすごく感動しましたっ！」

とたんピタリ、監督のペンは動きを止めていた。視線はやがて色紙から百々へと持ち上げられてゆく。

「ホントウデスカ？」

眼差しはまるで、ウソをつく子供を咎める母親のようだった。だからしていけない人だ、と監督は首もまた振ってみせる。

「エイガノヒトハ、ミンナ、ソウイイマスネ」

浮かべるがっかりした、と言わんばかりの表情は、百々にとって予想外も甚だしい。しかしながらもちろん百々には嘘をついているつもりなど、ましてや媚びているつもりなどこれっぽっちもありませんでした。

「アナタノ、カンソウガ、キタカッタデスネ」

ただ監督の言葉にはっとして、あの日の出来事を思い出す。それは鑑賞直後のやり場のない視線で、呪いさえ放った一部始終だ。

だのに口にしたのは宣伝用のキャッチフレーズにさえよく似ており、嘘でなくとも自身の感想だとは言えないほど様子を変えていた。

いつの間にそんなことになってしまったのか。作品の良さが分かったからか。だとすると百々に覚えはまるでない。そして何より目の前にいるのはあのブラック監督で、敬意をもつて接すればこそだった。借りてきた言葉で「あしらう」なんてとんでもないと振り返る。

「あの、すみません。言い間違えました」

伸び上がったのではなく体はただ、目覚めただけかも知れなかった。

「その、わたしの感想は、こうです」

ちゃんと映画を見たのだと、大事なあなたへ伝えたいと思う。

「本当は素敵な物語なのに、どうしてハダカばかりなのか不満でした」

監督と、話しがしたい。気持ちに偽りなどなかった。

「もっと誰でも見ることのできる映画がいいと思いました。そうすればわたしがそうだったように、みんなへ勇気を与えられます。わたしは勇気づけられて初めてこの映画が素敵な映画なんだ、って分かりました。同じように必要としている人はたくさんいると思います。過激なのは話題になるけど……」

生意気だろうとそこまで言って、もう十分だと先を濁す。

聞き入る監督の眼差しは百々の日本語を理解するためか、真剣そのものと厳しい。厳しいままに百々へ向かいザツツライト、と指を突きつけた。

「いつつ、のーにーず、つー、ちるどれん。コドモニハ、イリマセンネ。オトナガ、ミルネ。オトナニ、ミセルネ。ヒツヨウ、タクサン」

ペンが再び動き始める。監督はその先を身振り手振りで繰り返してみせた。だがそれ以上、言葉はうまく出てこないらしい。詰まってあれだよ、と宙で手を泳がせた。

決着をつけてパチン、指を鳴らす。

「ダイジナコトハ、ソレダケデス。ケレド……」

熱弁を切り上げた監督の手は百々へ差し出されていた。

「さんきゅー」

笑顔が心からの握手を求めている。

「さんきゅー」

その唐突な感謝の意味など分かるはずもなかった。ただ繰り返される言葉には、どこか、何か、素敵な世界へ誘う響きがある。それこそ夢か幻と、百々は導かれるままその手に触れていた。握り返された力の強さに、どの登場人物にも投影されることのない映画「バスボム」そのものが流し込まれてくるようで、秘密に触れた喜びにしばし胸を熱くする。

やがて解いた監督が、落ち着く場所を探ってソファで座りなおした。

「ナマエハ、ナントイイマスクカ？」

確かめるのは色紙の最後に記す名前だ。

「ど……」

思わず独り占めしかけて思い止まる。

「あ、違います。これは映画館に飾る分です」

「おう。あいしー。とうえにーせんちゅりー、しねま、ネ」

ペン先がキュッキュッと音を立てていた。果てに仕上がった色紙へ百々はもろ手を挙げる。

「ありがとうございます、え……」

が、受け取ったところで感極まらない。何しろそこに名前は「スタンリー・ブラック」とつづられていた。だがどう言うわけだかひらがなで、だ。しかも三歳児の殴り書きか、超がつくほど字は下手くそときている。

時間がかかるはずだと思っていた。同時にこんなものを水谷に見せて信用してもらえるのか。拭えぬ不安が百々を襲う。いや、そもそもこんなものを巨匠のサインと言ひ張り口ビーに飾っていいものなのか。ホンキで悩み、頼めずキミが書いたんじゃないの、と疑われる構図に「おおお」と唸った。

だが苦心惨憺、書き上げた監督はゴキゲンそのものだ。

「ヒラガナ、いえー」

書けるんですよと言わんばかり百々へ親指を立てている。だからといって返せば金輪際、新しいサインが頼めないことは理解していた。だが、しかしながら、拒めないものは拒めないのだから仕方ない。

「ひ、ひらがな、イエー……」

答えて百々も指を立てる。

人柄だ。この色紙には人柄があふれているんだ。理解しなおしたところで通訳と友人は戻っていた。

真意はどうあれ、こうして意気投合しているところを目撃されたからだ。その後の会話は思いがけず弾んでいる。

用意した菓子がいくらか消え、監督は緑茶のお代わりを求め、それは飲み干さんかという舞台挨拶十分前だった。水谷が、舞台挨拶の司会者を引き連れ部屋へ戻ってくる。淡いピンクのスーツを着こんだ司会者は女性で、さすがプロというべきか、著名人を前にしたところでそつなくすぐにも簡単な打ち合わせに入っていた。

ここでも日本語で「ゼンブキイテクダサイ」と両手を広げる監督はお茶目だ。眺めながら百々も、ドア脇で見守る水谷へ歩み寄ってゆく。

「支配人、映写室は？」

「回し始めるまでとフィルムの交換にはわたしもつき添いますが、後は田所君に任せます」
言うものだから百々の目は見開かれていた。

「ブラック監督をお見送りした後、代わりにカウンターへ入ってもらうことになりましたが、いいですか？」

それこそ田所の抜けた穴に違いない。

「はいっ！」

任せてくださいと返せば水谷の顔にあのホットミルクは甘く浮かび、引き締め、くつろぐ誰もへとその口を開いていた。

「それではお時間となりましたので、移動をお願いします」

同時に増す興奮こそ、宴ならではか。立ち上がった一行を引き連れ水谷は控え室を後にする。

いよいよだと百々は無人になった部屋を施錠し、先回りで鉄扉を押し開けフロアへ出た。とたん上がった歓声はもう暴力だ。いつの間にかフロアには見たこともないような黒山の人だかりが出来上がり、携帯電話のカメラは揺れ、その隙間に好奇の目に目をのぞかせている。

「うあ……」

唾然として、押さないでください、と通路を確保して奮闘する仲間の声に急ぎその隣へ食らいついた。

「コレ、すごすぎないっ?」

「アイドル、アイドル!」

今にもギャラリィはなだれ込んできそうだ。押さえたそのとき歓声のボルテージはさらに音量を上げていた。

監督だ。

水谷の後につき、ついにロビーへ姿を現す。ギャラリの勢いは飛びかからんばかりに増し、押さえる百々の前傾姿勢にも拍車はかかった。

「わっ。これより先は、入れまつ、せえーんっ!」

だが通用口でもそうだったように前にしたところで監督は平然としたものだ。むしろ朗らかと手を振りながら、足取りも軽くシアターAへ去って行く。

見えなくなればがぜん弱まる圧力は現金だといえた。助けられて百々も前線を離脱する。防音扉もスクリーン側、その傍らで出番を待つ監督らの後方についた。

姿の見えない水谷と司会者はもう中に入ってしまったようだ。黙って待てば、こんな奥

にまでフロアのざわめきは届き、冷めやらぬ興奮に混じって真横からついに新たななどよめきは吹き出してくる。

「……盛大な拍手でお迎え下さい！」

司会者の声が高らかと響いていた。振り返れば開かれた防音扉の向こうに促し導く水谷の姿があり、見定め踏み出すその前に、これからを示し合せて監督と通訳の微笑み合う姿はある。

そうして監督は、まだ何も投影していないスクリーンへその目を持ち上げていった。

十二時二十分。

これからを焼きつけスクリーンへ指を突きつける。

「これでい、あーくしょんっ！」

ショーの幕は今まさに上がっていた。

護送車を盾に距離を詰める。

脱出にまごついているのか、運転席のドアは開いたきりだ。まだ誰も出て来ない。

目出し帽の影はその後方でちらくと、目にしてレフは立ち止まる。

マガジンには十一発。落とした腰で突きつけ伸ばした右手の銃へ、左手を添えるが早い

か引き金を絞った。遮蔽物のない現状に二発ずつなどとしおらしいことは言っておれない。緩めることなく絞り続ける。

吐き出され続ける弾は非情なほどに機械的で、浴びて飛び退くように目だし帽たちが引き下がる。

入れ替わるように護送車の運転席からようやくやく制服は転がり出ていた。押し出しハートも現れたなら、タクシーの運転手を拾って離れろと怒鳴り声は聞こえてくる。別れて車体に背を添わせたハートはそれきり、リアへにじり寄っていった。

その傍らをかすめて走り去ったワゴンは、シルバーパーバンの進入を押さえて車体を斜めにブレーキを踏んでいる。対峙して後退したシルバーパーバンは、ずいぶと距離をおいたところでブレーキを踏んでいた。

と、ハートがレフへ視線を投げる。

そこで弾切れとレフの手の中、銃のスライドも開き切った。

屈み後ずさっていた目出し帽たちの、銃口がここぞとばかり持ち上がる。

逃れてレフが身をひるがえせば、すり寄ったリアから銃をのぞかせたハートのタイミン
グは完璧といえよう。切れ目なく浴びせる銃弾で即座に牽制してみせる。

その頃、駆けつけたのはパトカーが五台。機動隊を乗せたグレーバスが二台だった。中

から制服たちは吐き出されて散らばると、一般市民の隔離と避難を始めている。

そもゆかない背後の直線レーンはシルバーバンの進入で玉突き事故を起こしたらしい。完全に車列を詰まらせていた。

その先頭で真横に停めたワゴンから、ちょうどと這い出してきたストラヴィンスキーの姿がレフの目に留まる。

目測でなら十メートル強か。測りつつ新たなマガジンを押し込む。

ちょうどで全弾撃ち尽くしたハートの体が、再びリアへ押しつけられるのを見た。

向かって始められた目だし帽の猛攻は近距離ゆえに凄まじく、チェンバーへ弾を送ってレフはマイクへ吐く。

「ワゴンまで走るぞ」

なら次を手早く装填し終えたハートの返事はこうだ。

「でかいポイントマンが、食らって泣くな！」

否やスタートを告げて二発。引き金は引かれる。

答えて返す暇などない。レフは地面を蹴りつけた。目だし帽の視界を横切ると一思いにワゴンへ走る。

追いかけて目だし帽が視線を逸らしていた。悲しいかな動くものを追わずにおれない人の

目の習性に、連なり体もレフへと振れる。向かって残弾、まき散らした。

弾けてアスファルトがレフの行く手で粉を吹き上げ、阻止してハートはそのとき身を弾ませる。

「お疲れ様です！」

ボム、とワゴンのボディが鳴っていた。

体当たりさながら転がり込んで、目もくれず投げるトラヴィンスキーへレフは唇の端を持ち上げ返す。

「ジーブ二人を制圧！」

上がったハートの声に視線を投げたそこで、サブマシンガンを投げ出し突っ伏す目だし帽と、両手を挙げてひざまずく目だし帽を確認していた。

「じゃ、くれぐれも、こっちだってお願いますよ！」

声に見やっしたシルバーバンでドアは浮き上がると、中から男は二人、案の定のいで立ちで抜け出してきている。

見定めストラヴィンスキーがボンネットへ身を投げ出した。同時に絞る引き金でけん制する。

驚きドア影へ身を縮めた目だし帽の反応は早く、食らったフロントガラスが割れて白く

くもった。さらに撃ち込んだストラヴィンスキーは、元の位置へと屈み込む。

「中にまだ二人！ フロント割れて見えないんで、出てきますよ！」

「誰か回収にこい！」

取り押さえた目出し帽を引きずるハートが、護送車の前で警官を呼んでいた。

などと注意が逸れたそのとき気配はかすめる。

頭上へ碎けてドアガラスは降り注いだ。

二人がかりの反撃が、右へ左へワゴンを舐める。

「ちよっ……！」

ガツガツとめり込む弾に震える車体が心もとない。縮められるだけ縮めたところで大差のない体のまま息を詰めた。

尽きるころには強化ガラスまみれだ。

「右、もらうぞッ」

切れると同時だ。レフは身を跳ね上げていた。

従い左へ身を反転させたストラヴィンスキーが、運転席側の目出し帽を仕留めてみせる。だがマガジン交換で屈み込んだか、助手席側、開いたドアに人影はない。むしろその奥、後部座席から抜け出た三人目をレフは目にする。もれなくその手にも銃はあったなら、銃口

がこちらを向く前だった。迷わず三発、レフは見舞う。かすって体を揺らしたところで、倒れなければ改め引き金へ力を込める。

と、マガジン交換が終わったらしい。狙う相手の足元から護送車へと目出し帽は抜け出してゆく。

「クソッ」

追えず吐いたところで、ストラヴィンスキーが前線復帰していた。

見逃し、任せて、レフは助手席の一人へ発砲する。よれるように倒れたなら、知らせて肩をひるがえした。

「ハートツ、そっちへ一人、行ったぞッ」

追いかけてストラインスキーも、ボンネットを回り込んでゆく。

ならそれは忘れていたような四人目だった。折り曲げていた体を伸ばし後部座席から、のそり立ち上がる。

向かってレフは銃口をかざしていた。その目をこれでもかと思開く。四人目の重たげな動作の理由はこうだ。

「ルチノイー・プラチヴァターンカヴィイ・グラナタミョートツ？」

口走ったそれがロシア語なら、横目で捉えたストラヴィンスキーはたった三語で訂正し

ていた。

「R、P、G！」

全長一メートル足らず。重量およそ七キロの対戦車砲は、あろうことか目出し帽の肩でワゴンを睨む。

喘ぎ、きびすを返していた。

三十六計、逃げるにしかず、がどちらの頭に浮かんだかは別として、追い上げ射出された弾頭がブースターへ火を入れる音を聞く。

初速、毎秒百メートル。

屈もうとしたところで、走り出したところならままならない。猛烈な加速音が背後に迫る。

飛び越すことなく弾頭はワゴンへ突き刺さった。グシャリ、車体は押し潰され、中でストロボと閃光は瞬く。

直後、ピリリと肌を震わせ破裂音が空を叩いた。

弾かれ車体は跳ね上がり、炎は上がらず熱をはらんだ煙だけが鎌首を持ち上げるように立ち昇る。爆風は確かに同心円を描くと静かに、しかし破壊力を携え交差点を這っていった。飲まれてレフトストラヴィンスキーは吹き飛ばされる。華麗に二回転などとそれこそ編

集のたまものなら、望めず摩擦抵抗も最大とアスファルトへ全身を擦りつけた。

衝撃に警官も機動隊員も、誘導されていた一般市民さえもだ。驚きそこで振り返る。爆風はそんな彼らをも飲み込むと建て込むビルの隙間へと走り去っていった。

やがて前へ後ろへワゴンの破片が降る。停まる車両のガラスを割り、ボディをことごとくへこませた。

避けてハートも身を縮めるが、RPGの声を聞いていたなら冗談だろうと思うほかない。目出し帽を警官へ押し付ける。早いか護送車の影から飛び出していた。黒焦げとシャーシを剥き出しにしたワゴンへ息をのみ、その向こうに横たわるレフとストラヴィンスキーへ目を凝らす。

と、まだ何が燃えるというのか。漏れたガソリンに火は点いて、ワゴンはあつという間に炎に包まれた。

駆け出しかけてハートは思わず押し止まり、視界の端を横切るものに振り返る。レフが知らせてよこした目出し帽だ。中央分離帯を越えると連なる車列をぬい、護送車へ向かい走っていた。

「レーフッ！ ストラヴィンスキーッ！」

呼びかけともかく目出し帽へ銃をかざす。

「男、二人。MP5所持。一人はまだ距離がある。離れるぞッ」

マイクへ告げて目だし帽へ放つ。今度こそと駆け出した。

されたところでたまったものではなかったが二発目を装填する気はないらしい。四人目の目出し帽はRPGをMP5へ持ち変えると、ハートと入れ違えて護送車へ向かっている。目で追えば背後から反撃の銃弾は放たれて、かいくぐりハートはレフの傍らへ滑り込んだ。だとしてそもそも優しく揺り起こすなど、キャラクターどころかこのシチュエーションが許さない。

「起きろッ！」

力任せとジャケットを掴み上げる。すかさず離れた場所に転がるストラヴィンスキーへも声を上げた。

「ストラヴィンスキーッ！」

音量にレフの体は跳ね上がり、ほどなくストラヴィンスキーもその頭を持ち上げる。

「悪く思うな。この起こし方が、俺の田舎では主流だ」

燃えるワゴンの影へ引きずり込んだなら、ストラヴィンスキーの襟首もまた掴んで引き寄せた。

「……あ、あの世まで、吹き飛ばされたかと思いました」

「お前が思うほど近くはない。安心しろッ！」

吐き出される黒煙の合間にちらつく目出し帽たちは、背中合わせのポジションを取るともう護送車の後部ドア前にいる。

「二人、リアについたぞ」

「先の奴は残弾が少ない。RPG野郎が外を見張るハズだ」

調子を取り戻したレフが教えた。

「誰かジープのキー、抜いてくれるといいんですけど」

少々歪んだ眼鏡のブリッジをストラヴィンスキーが押し上げたなら、アーミーベストから抜き出した予備のマガジンをハートはすかさず二人へ投げる。

「ここで逃がすか。笑い草だぞ」

「他は？」

ハナだ。混ざりイヤホンから声はもれていた。

「見当たらん」

むしろこれ以上は勘弁である。

「じゃ、ポイントマンズ、よろしく」

口ぶりに、しばし三人して顔を見合わせたことは言うまでもない。やがて飲み込み先陣

を切ったのはやはりストラヴィンスキーだった。

「はいはい。仰せの通りに」

四つんばいできびすを返す。見送ったならハートもまたアゴを振ってレフへ別方向を促した。

読みとおり、周囲を警戒するのはRPGを放った四人目の目出し帽だ。もう一人はその背でドアの開閉を確かめている。施錠されているとわかるや否や、めがけて滅多撃った。

潰されたドアノブにひねる必要などもない。次の瞬間にも剥がすようにドアは引き開けられる。

だからして次々とドアを撃ちぬく銃弾に、車内でコート二人は立ち上がっていた。まさぐった懐から回転式の拳銃を引き抜き事態に備える。

だが前に入るスペースもなければ、後じさろうとしたところで車内はどうにも狭かった。身動き取れず立ち位置を決めかねていれば、やがてドアは片側だけが引き開けられる。背中越し、そこに視線を投げる目だし帽の姿はあった。そいつか、と目がけて銃を持ち上げたその時だ。翻弄して傍らへ二人目は姿を現す。

刹那、サブマシンガンは火を吹いていた。

護送車の屋根に一列と穴は開き、すかさず銃口がコートへ据え直される。

「動くな、銃を捨てろ！」

引き金に触れたままの指が、すでに圧倒的なストロークの差を見せていた。火力さえかなわないなら判断材料はそろったも同然となる。

コートは渋々両手を挙げていった。拳銃を足元へ投げ捨てる。

「榊大輔か？」

見届け、うづくまったきりの人影へ目出し帽は視線を飛ばした。揺れてうなずき返したファーに、声を張り上げる。

「鍵を外して縄を解け。早くしろ！」

乗じてフードも立ち上がった。従え、と言わんばかりだ。手錠のかけられた両手を突き出し迫る。

前にしたコートの頬が噛みつぶした奥歯に削っていた。だが時間稼ぎの意味こそない。二人がかりで手錠と腰縄を解きにかかる。

あつという間に自由を取り戻したフードが、投げ出された拳銃を拾い上げていた。掲げ、苦い表情を浮かべるコート二人を睨みつけながら車内を外へ後じさる。

「……予定通りだ。同士。プライズにサプライズ。二十四日、我々は蜂起する」

その肩へ目出し帽は囁きかけていた。

瞬間、拳銃を握り絞める手はフードの袖口で白く筋張る。ファアの奥からあのくだりは、そうして放たれていた。

「与えられる楽しみは全て、楽しむことを義務付けられた労働だ。捕らわれた全ての民衆に真の娯楽を！」

その声は細く高い。

背を向けていた四人目さえ、驚きフードへ振り返っていた。

つまり声で正体が明らかとなるこれがタイミングなら、路面で人影もひるがえる。翻弄してフードも目出し帽へときびすを返していた。その後ろ足へ体重を乗せるが早いか、目と鼻の先で啞然と見つめる目出し帽へ引き金を絞る。

目出し帽の肩を貫通した弾が路面で白く粉を吹き上げていた。投げ出された体は跳ねて鈍い音を立て、様子に動く影へサブマシンガンを構え直していた四人目もぎょっと振り返る。切り返す靴先でそちらへも、すかさずフードは弾丸を放った。

まもなく開けた視界に落としていた腰を上げてゆく。止めていた息もまた長く吐き出していったなら、暑苦しさも限界と口元を覆っていた前立てを開いてフードを払いのけた。中から艶めく黒髪が揺れて宙へと躍り出す。

「護送車、二名、制圧」

告げてハナは下りたままの撃鉄を、元の位置へ押し上げていった。

「発砲に関する書類はわたしが」

まだ熱の残る銃身を避けて握りなおし、大げさに目を回してみせコートへ差し出す。自前の一丁を懐から引き抜くと護送車から飛び降りた。

「まったくもう。どういうこと？ これは」

玉突き事故の縦列に、散在する車両らしき破片。それどころか交差点の真ん中では豪勢と炎さえ上がっているのだから言うほかない。

「そのセリフはチーフに残しておいてやれ」

握られたままのサブマシンガンを踏みつけたところで、イヤホン越しにハートの声を聞いている。

「お見事！ ホント、なによりでした！」

満を持して放つストラヴィンスキーへは、笑うしかない。

「彼ら、紳をよく知らなかったみたいよ。背格好、合わせて、あたしじゃなくてもよかったんじゃない？」

向かいでは投げ出されたもう一丁を、コートが拾い上げている。提げて振った手で警官

を呼んでいた。

見て取り警官たちは群がるが、暴れるほどと二人はまだ元氣だ。振り回されて人だかりは揺れ、いつの間にかすすけた体を払ってレフも、玉突き事故の車列前から顛末を眺める。今や「るるロード」エントランスを拠点に辺りは、完全封鎖と囲われた状態だ。路肩には救急車が連なり、消防車の侵入を告げて拡声器の音が道を空けるよう促している。

見渡すほど取り戻されてゆく落ち着きは呼吸さえもを整えてゆくようで、だからこそ目は、慌ただしさから浮いたようなそれを異質ととらえてもいた。

後回しと放置されたジープはそこに停まっている。相手の正体が知れないからこそ気にかかり、レフはそちらへ足を繰り出していった。

ドアへ手をかける。安全装置をかけた銃を懐へ戻し、中へ頭を潜り込ませた。独特の二オイが鼻をつく。

挿されたきりのキーにぶら下がるキーホルダーが、アイドリングに揺れていた。直前に買い揃えたらしい。座席には目出し帽が入っていたと思しきビニール袋が散乱し、引き出された灰皿からは半分も燃していないタバコがあふれて座席にキャビネットを汚している。叩くように払って開いた。ありきたりなカー用品は引き出されて、一瞥するだけで十分なそこから後部座席へ身を乗り出してゆく。広げられたままの地図を目にしていた。

ピンクの蛍光マーカーはその中の交差点を幾つか囲い、指でなぞった三つ目に「ここ」るるロード」前交差点を確認する。確かに移送先が普段通りの拘置所なら、ルートの限定もさほど難しいものではなかったろうと思えた。それを見越しての罠だったとして、いい気はしないとレフは地図を裏返す。下から現れたトランシーバーを取り上げていた。

連携を取る相手がいるとするならシルバーのバンド。動作を確かめ、上部に飛び出しているつまみをひねる。先ほどまで使われていたことを示してトランシーバーは作動すると、答えて返す相手を失った今、低く雑音をばかりを流し続けた。

聞いていても仕方ない。つまみを絞りかける。

押し止めて強い雨脚のような雑音は流れ出していた。

何事かと手が止まる。だが声こそ聞こえてこない。不可解にしばし眉間を詰めた。ワケを探してトランシーバーを見回せば、プライベートチャンネルの存在を確認する。他に内容を伏せたまままで通信が行える個別会話用のボタンは数個、本体上部に並んでいた。

つまり、とそのとき視線は跳ね上がる。唐突に鳴り始めた雑音こそプライベートチャンネルの使用が原因なら、言うまでもなく存在しているのは使って会話をしている何某の存在となる。

まだ誰かいる。

過るが早いかりアウインド越し、レフは周囲へ視線を走らせていた。何しろこの待ち伏せ自体、護送車の動向を知らせる何某の存在があればこそ、ああも的確に行えたのではなからうか。思えてならない。しかしながら想像できるのは散々なこのザマにこちら以上、急務となった事態の収拾だった。雑音はそのことを慌てふためきまくし立てているものではないのか。思うままに見回す両目へ力をこめる。間違いがなければ相手は一带を見渡せるどこかにいるはずだと、フロントガラスへ振り返った。

だが交差点周辺の建物はテナントビルばかりで、並ぶ窓はオフィスがほとんどきている。紛れて見下ろすには不向きとしか言いようがなく、だからといって動く物を追い続けるに、どのビルも屋上は高い。

と、レフの動きはそこで止まっていた。

それは国道沿い、商店街アーケード側の歩道だった。そこだけが張られた規制線の隙間から、たかる野次馬をのぞかせている。まさかと目を細めていた。睨みつけたまま、ゆっくりジープから体を引き抜いてゆく。

通信中の雑音はまだ切れていない。並ぶその口元を追ってまさぐるように視線を走らせた。なら人垣は目隠しして立つ警官の列を破りそうに膨らんで、倒されそうにつんのめったスタジアムジャンパーの眼鏡男が注意を受ける。

引き下がるその目と目が合った。

いやこの距離だ。そもそも目が合ったことも、フレームの向こうでそんな男の表情が強張ったように見えたことも、単なる思い過ごしかもしれないなかった。そして男もあえて目を逸らすようなことをしなければ、ただ体を起こしていっただけで他愛もない。

雑音はそこで切れていた。

だとして半信半疑であることは否めない。レフはトランシーバーを持ち上げる。確かめる方法があるとするとするならこれしかない、口元へあてがった。

「聞こえるか？」

送信ボタンを押し込み問いかける。

「うまく紛れたつもりだろう」

喋りながら符号する反応を探した。

「だが、あんたのツラはここからでもよく見える」

いや、見えないからこそ言うしかなかった。

「そこから動くな」

間をおく必要こそありはしない。

「今からそこへ行く」

飛び出すヤツがいればそいつだと、最初、一步を踏み出した。

「おい、どうした？」

聞きつけたハートの声がイヤホンから呼びかけてくる。答えずレフは人垣を凝視したままトランシーバーの送信ボタンを再度、押し込んだ。

「逃げるなら、今のうちだぞ」

歩みを駆け足へ切り替える。

ふい、と前方でスタジアムジャンパーの眼鏡男が視線を逸らしていた。見飽きたようにも思える仕草でさらに半歩、最前列から身を引いてもみせる。

まさかと思うからこそだった。あえてレフは立ち止まる。シンクロするように動きを止めたスタジアムジャンパーの男の視線が、うかがうような粘りを残してレフへと流れた。理由など言わずもがなだろう。逃げるかどうかをためらっている。予感はそのとき確信へ変わり、レフは嚙んだ奥歯でアスファルトを蹴りつける。とたん呼応するように野次馬の中で、スタジアムジャンパーの男も体を弾ませた。

「待てッ」

「おいッ、何があったか言えッ！」

察したハートの声がささくれ立つ。

「まだ一人、いるッ」

答えるうちにも、それほど背の高くないジャンパーの頭は野次馬の中へ埋もれていった。追いかけてレフも飛び込めば暴拳に野次馬から鈍い声は上がり、肩で弾いてもかくマイクへ吐く

「男、眼鏡、短髪。百七十センチ余り。細身。カーキーのスタジアムジャンパー」

ままに前のめりで野次馬から飛び出した。走るジャンパーの後ろ姿を商店街のアーケード前にとらえる。

「おい、分かっているのか？ 勝手に飛び出すなッ！ 相手が一人とは限らんぞッ！」

「なら追いかけて来いッ。靴は濃いグリーン。似た色のカーゴパンツッ」

唸るハートへ叩き返し特徴を追加した。

受けたオペレーターの手際のよさは、いつもながらピカいちだ。早くも聞き及んだ警官が特徴そのまのいでたちで走り来る男へ、あっ、と開けた口で行く手を塞いでみせる。対峙したジャンパーはいつとき足を止め、迷う間もなく商店街に並ぶ店の裏手、テナントビルとビルの間へ身をひるがえた。

すかさず知らせて警官が応援を手配している。

任せてレフもそこへ飛び込んだ。

狭いうえにゴミの散乱した足場は酷い。その中をジャンパーは飛ぶように走ってゆく。軽い身のこなしで壁を押しやり左折すると、さらに細くなった隣り合う建物の隙間へ潜り込んだ。その向こうに商店街に敷き詰められたオレンジのタイルはのぞく。ジャンパーは踊り出しかけて、駆り出された警官の姿にその足を止めた。

振り返った目が迫りくるレフをとらえて窪む。

流して傍ら、アーケードを支える鉄骨を見上げた。簡易ハシゴはそこにコの字と取り付けられると、最初数段を端折る勢いだ。ジャンパーは伸ばす両手で食らいついた。

「止まれッ」

向かってレフは銃を引き抜く。安全装置を弾き上げる早いか、引いたスライドでジャンパーへかざした。だがその間にも視線より高い位置へ上がってしまったジャンパーに、止まる気配はまるでない。

払いのけるようにして銃を下ろしていた。トランシーパーもろとも腰へさす。追いかけてレフもハシゴへ飛びついた。手繰り、蹴上がったそこに緩いカマボコ型の屋根は滑走路かと伸びる。

ジャンパーはその先、メンテナンズ用のキャットウォークを靴音も軽く駆けていた。かと思えば切れ目からポリカーボネイドの屋根へ躍り出る。渡り行く足元はどこか柔く頼り

ない。見定めレフも手すりを飛び越え躍り出た。微妙な弾力をもてあましつつ屋根を走れば前方で、再びキャットウォークへ上がったジャンパーは隣接する建物の屋上へ飛び移ってみせる。

真似てレフも建物へ飛び出しかけた。

ぱっくり開いた互いの距離に、つい踏みきれず押しとどまる。のぞきこんで感じるそのほとんどは、間違いなく錯覚だ。

端まで下がり、つけないおした勢いで跳躍した。

案の定、なんなく着地すればジャンパーが、ついてくるのかと肩越しに振り返る。当然だと睨み返せば唯一、たたずんでいた貯水タンクの向こうへ駆け出した。

その足が再び床を蹴りつける。体はいつとき宙に浮いたように見え、次の瞬間にも吸い込まれて下方へ消えた。

駆け込み、のぞき込めば三メートルほど下だ。真四角に広がるそれはガソリンスタンドの屋根か。着地すると衝撃を逃して身を転がし、起き上がると再び走り出している。

だとして一度こなせば後は同じだ。迷わずレフも身を躍らせた。潰れるような着地にマネたわけでもなく一回転して唸り、持ち上げたアゴで先行くジャンパーの背をとらえる。かまうことなく端までたどり着いたジャンパーはそこで、下をのぞくと右へ左へ、行っ

たり来たりを繰り返していた。確かに大型トラックも入り込める高さの屋根だ。いくら身軽な彼でもここから飛び降りることは無理だろう。

「……ッ」

ここぞとばかり身を起こしていた。切れ始めた息を押さえてレフは、これが最後と距離を詰める。

がそれは突きつけるべく回した手がグリップへ触れたかどうかというタイミングだ。見えているかのようにジャンパー、はまたそこから身を躍らせる。

「くそッ」

止まりかけていた足へ再び力を巡らせていた。ジャンパーの立っていた位置まで一気に加速する。のぞきこめばジャンパーはガソリンスタンドへもぐり込んでゆくトレーラーの荷台に食らいついていた。ままにリアを伝い地面へ滑り降りてゆく。おそらく目指していたのはその車なのだろう。切り返した靴先で、混み合う路面の傍らハザードを点滅させる。白い軽自動車へとステップを踏む。

「商店街、東通りガソリンスタンド。逃走車は白の軽。ナンバーは遠くてまだ見えないッ」
ともかくマイクへ吹き込んでいた。

その間にもトレーラーは屋根の下へ吸い込まれてゆき、黒いバンは侵入してくる。

舌打つのは次を取る行動を決めているせいだ。車高は低いが、この際ないよりマシだと考えるほかない。

「野郎ッ」

ひと思いとレフはガソリンスタンドの屋根を蹴り出した。タイミングは悪くない。

証明してごぼ、とバンの屋根も己が形にへこむ。そんな車体に掴みどころはない。もんどりうって滑り落ち、投げ出さされた地面で身を起こしていた。

背で、受けた衝撃にバンがブレーキを踏んでいる。ガソリンスタンドの店員も突然、空から降ってきた男に驚いている様子だ。だがジャンパーは白い軽自動車のドアへ伸ばした指を引っかけている最中で、弁解しているヒマなどない。

駆け出した姿をとらえた軽自動車が、にわかには動き出していた。寄り添い、残されてはたまらないと小走りでジャンパーも、懸命にドアを引き開け足から車内へ滑り込んでゆく。否や、軽自動車は速度を上げていた。ようやく見え始めたナンバーさえ隠すようにして反対車線へフロントをねじこむと、混雑する車両の間をぬいあつという間にレフの前から遠ざかって行った。

見えなくなるまで、いや、見えなくなっても追い続け、もつれだした足に一足、二足、アスファルトを大きく蹴りつけレフは立ち止まる。

逼迫した呼吸に自分でも分かるほど顔は歪んでいた。だが取り繕うなど無理ならば、剥き出しにしてただ滔々と流れる車両を、その彼方を睨み続ける。

その腰回りからだ。ザツと音は聞こえていた。覚えがあるならまさか、と視線を落とす。「お疲れ様」

やけに涼しい声はトランシーバーからもれていた。同時に眼鏡をかけたあの顔は蘇り、筆り取るようにしてレフはトランシーバーを掴み上げる。

「いいか、トムとジェ、リーは、次が、最終回だ」

乱れる息に、吐きつけた言葉は途切れ途切れとなっていた。

「仲良くケンカしな。対テロの、それが常套だったかな」

笑い声が微かと混じる。

「革命は起こさせ、ない。おまえたちは、永遠同志を募って、まわれ」

「それはリーダー次第だよ」

間髪入れぬそれは返答だ。

「我々は彼を敬慕しているからね。ファンとして、彼の望みを実現するため全てを準備してきた。だがリーダーが蜂起しないならそれまでさ」

思い出したように「あ」と挟んでこうもつけ足して言う。

「勇敢なトムに感動しすぎたかな」

「そのリーダーは誰だ」

無駄だと分かっているにも関わらずにはおれない。例外なく聞き流す声はそこで、ひとつトーンを上げていた。

「楽しかったね。公安のトム、また会おう」

不躰な雑音が会話に終止符を打つ。

背後から、やがてサイレンを響かせパトカーは追い抜いていった。白い軽自動車めざし車列をかき分ける。猛烈な勢いでレフの中、遠ざかって行った。

それきりだ。押し込んだ送信ボタンから指を浮かせても、電源を落としたらしい相手から応答はない。沈黙するトランシーバーを、レフは届かぬ相手の横面のように叩きつけた。思いがけず拳とは別の場所が痛んで目を細める。

困って行き交う人々はまだ何も知らない。向ける視線は怪訝を越えて怪しげだ。立ち尽くすレフをただ眺め続けていた。

そして十三時ちょうど。警察病院の屋上から一機のヘリは舞い上がっていた。ドクターヘリだが操るのは言うまでもなく乙部だ。

何しろ署から救急車で運び込まれた患者は、口がきけない重症患者ときている。傍らにはだからして、白衣の天使とまではゆかないものの、遥か下方の街並みにおっかなびつきり、渡会もまた付き添っていた。

受け入れ先は中新田村拘置所だ。

後部座席に榊大輔を乗せへりは、遮られることのない大空を我が物顔で突き進んでゆく。